

ISSN 2186 – 3989

就職活動と TOEIC スコアの関連性

島田 博行、大東 万里絵、福山 悠介、後藤 和史、吉田 明代

Relationship between Job Hunting and TOEIC Score

Hiroyuki Shimada, Marie Daito, Yusuke Fukuyama, Kazufumi Gotow
and Akiyo Yoshida

北 陸 大 学 紀 要
第57号(2024年9月)抜刷

就職活動と TOEIC スコアの関連性

島田 博行* 大東 万里絵* 福山 悠介* 後藤 和史* 吉田 明代*

Relationship between Job Hunting and TOEIC Score

Hiroyuki Shimada*, Marie Daito*, Yusuke Fukuyama*, Kazufumi Gotow*
and Akiyo Yoshida*

Received July 23, 2024

Accepted September 5, 2024

抄録

北陸大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科ではディプロマポリシー等でも言及されている通り、英語力の養成に力を入れている。その背景には、グローバル人材の育成があり、英語力はそのような人材育成の、いわば必要条件として考えられている。しかしながら、国際コミュニケーション学部が創設されてから約 8 年が経過し、4 学年分の学生たちが社会に飛び立っていった中、その英語力の養成が実際にどのように学生の進路に影響を及ぼしているかは検証されていない。本研究では、その点に着眼し、TOEIC スコアが就職業種（進路選択）に与える影響を検討することを目的にデータを分析した。その結果、まず中国語選択者に比べ、英語選択者のほうがより TOEIC スコアが上昇していることが見いだされた。これは、英語教育のセッティングが TOEIC という観点において有効に機能していることを示している。また、TOEIC スコアの上昇、最高スコアに加えて留学などの海外での語学研修が、メーカー、旅行・ホテル業、情報・通信業、英語科教員への就職率にプラスにはたらいっていることが示唆される知見が得られた。

キーワード：TOEIC スコア，就職活動，英語力を活かせる業種

* 北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

1. 英語力と就職活動¹

北陸大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科（以下、本学科と称する）では、人材養成の目的に「地域社会及び地域産業のグローバル化に貢献し、世界と地域をつなぐことのできる語学力と国際感覚を持ったグローバル人材を養成する」ことを掲げている。また、ディプロマポリシー（DP）においても「英語または中国語の実践的運用能力を身につけている」と明記している。本学科では、この英語力のアセスメントとして、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（以下、IIBC と称する）が実施している TOEIC Listening and Reading（以下 TOEIC と称する）を用いて学生の成長を計測している。

TOEIC®Program DATA ANALYSIS 2023 によれば、2022 年の受験者は 784,310 人とあり、TOEIC は現在大学や一般企業等で最も活用されている英語の資格試験の 1 つであると言えるであろう。また、一般企業を対象に行われた IIBC の調査によれば、「採用時に TOEIC®Program を利用していますか」という質問に対して「要件としている」あるいは「参考としている」と回答した割合はおよそ 50% 程度、そして、新入社員に期待するスコアは 535 点との回答があった。² 無論、この点数というのは英語を使う業務の有無等に関係なく、押し並べて期待されるスコアと言えるであろう。言い換えれば、550 点を取得していることそれ自体は、以下でも言及するように、一般的に見て優れた英語力があることの証明にはならない。

そこでまず疑問として浮かび上がるのは、果たして何点取得しているのが望ましいのかという点である。この点に関しては、大きく分けて二つの視点で考えなければならぬ。一つは一般的に履歴書に書けるスコア、そしてもう一つは英語が実際の職務において求められる際のスコアである。まず前者から考えてみると、こちらの問いに関してはさほど大きな見解のずれがあるようには見受けられない。様々な就活・転職サイトあるいは英会話学校のホームページ等、何を参照してもそのほとんどが「履歴書に書けるのは 600 点以上から」と言及されている。事実、書店やオンラインにおいても TOEIC で 600 点を目指す本というのは無数にある。逆に言えば、上述の新入社員に期待するスコアからもわかる通り、そもそも 600 点を取得しているということ自体がさほど容易なことではなく、一つの目標・目安として少なくとも日本国内では認知されていると言っても良いであろう。

では、二点目の疑問についてはどうだろうか。言うまでもなく、個々の企業や業種・職種によって異なるわけであり、一概には言い切れない。そこで一つの指標として英語教員を取り上げてみよう。文部科学省が実施している「英語教育実施状況調査」における英語教員に求められる英語力の水準は TOEIC では 730～785 点以上としていることがわかる。³

また、TOEIC®Program DATA ANALYSIS 2023 によれば、職種で「教育」を選択した受験者の平均も 713 点と表れている。さらに、同資料によれば、職種で「海外」と選択した受験者の平均は 731 点とされている。この辺りを鑑みると、日常会話以上の英語力が求められる職務において必要とされる TOEIC スコアは 730 点相当（IIBC の Proficiency

¹ 無論「英語力」という言葉が指す力は TOEIC スコアだけではないが、本論文では TOEIC スコアの力も英語力の 1 つと捉え、「英語力」と称することとする。

² 詳細は以下を参照。<https://www.iibc-global.org/toEIC/special/job/c4/intern.html>

³ 平成 29 年度の調査までは TOEIC では 730 点以上、CEFR では B2 以上との表記だったが、平成 30 年以降は CEFR B2 以上との表記になった。文科省では 2015 年の時点では英検準一級及び CEFR B2 を TOEIC LR で換算すると 785 点以上としている。

Scale の区分における B レベル相当) と見なしでも良いであろう。⁴

このように、改めて本学の学生が目指すべき数字を想定した上で、これらの目標・目安に到達した学生は、実際に就職活動においてどのような恩恵を受けるのだろうか。とりわけ国際コミュニケーション学科では、将来は英語を使った仕事に就きたいという学生の声も少なくない。また、本学の学生の中にはベストスコアこそ 600 点台で止まったとは言ってもその伸び幅では大きく成長したと言える学生、あるいは、大きな伸び幅だけでなくそのベストスコアそれ自体も上述の 730 点相当以上に届いた学生もいる。そのような学生はどのような就職先を選び、社会に旅立っていったのだろうか。これまで 2017 生から 2020 生までが卒業し社会に旅立っていったが、このような英語力と就職活動・進路との関係性に関して細かく検証されたことがなく、実態は未だ把握されていない。その為教職員においても、その多くが「英語力の育成が就職とどのように結びつくのか」という学生あるいは保護者の質問に対して、はっきりと学生に説明できないということもあるだろう。また、それゆえに学生の目標設定に関してもきちんと明確にされていない状況と言える。

本稿では、「就職活動と TOEIC スコアとの関係性」に焦点を当て、(i) TOEIC スコアの上昇にはどれほどの時間を有するのか、(ii) TOEIC スコアにおいて成長する・高いスコアを取得することが、学生の将来にどのような影響をもたらすのか、という点に焦点を当てその分析を試みる。そしてその検証を活用し、今後のカリキュラム運営や進路指導の質の向上といった側面にも寄与することを図りたい。

2. 先行研究

大学における英語教育とキャリア形成について議論するにあたっては、本来であれば「社会において英語は実際どれほど必要とされているのか」という根本的な問題を避けて通るべきではないだろう。寺沢 (2013, 2015) によれば、「日本版総合的社会調査」および「ワーキングパーソン調査」の 2000 年から 2010 年にかけてのデータを見ると、英語に対する主観的な必要感・有用感を持つ回答者はいずれも 4 割程度であったのに対し、「仕事で英語をよく使う」「時々使う」と回答しているのは 1 割程度であったという。Terasawa (2023) では、2022 年にアンケートパネルを用いて実施した調査結果から、過去 1 年間のうちに仕事で英語を「週に数回以上使用した」という回答者は 5.8%、「週に 1 回程度使用した」は 7.9%であり、一方で「日常的に（週に数回以上）仕事で英語を使用している成人日本人の割合はどれくらいだと思うか」という質問への回答の平均値は 22.9%であったことが示されている。仕事での英語使用タイプ別では「英文を読む」が最も高く 18.8%、対面あるいはオンラインでの「会議」ないし「議論交渉」が最も低く 3.83～5.48%、また「翻訳ツールの使用」は 22.79%とのデータも示されている。これらの先行研究からは、仕事において日常的に英語を使用している日本人の割合はイメージされているよりも低く、産出的スキルよりも受容的スキルのほうが多用されており、さらに翻訳ツールの使用が一般化しつつあることがわかる。

それでも、英語力の獲得とキャリア形成とを結びつけるような言説および英語教育プログラムを、学生の英語学習に対する動機づけとして利用することは可能であろうし、実際にそのような観点から大学における英語教育について考察した論考は少なくない（甲田他

⁴ IIBC の Proficiency Scale の区分については以下を参照。

https://www.iibcglobal.org/hubfs/library/default/toEIC/official_data/lr/pdf/proficiency.pdf

2006, 塩沢他 2006, 喜田 2008, 林 2008, 岩井 2012, 八尋他 2014, 西原 2017 など)。特に動機という点では、高梨 (1991) が大学生 201 名を対象とした調査から、英語力の上位群では「統合的動機づけ」(目標言語の社会や文化に溶け込みたいという志向が言語学習のモチベーションとなるタイプ)の影響が強く、逆に下位群では「道具的動機づけ」(試験, 就職, 社会的地位など実利的な利益獲得が言語学習のモチベーションとなるタイプ)が強いことを示している。後述するように、本学科の学生の過半数が、高梨の調査において「学力下位群」に振り分けられたグループに属するであろうと思われる。⁵ とすれば、就職成功率と TOEIC スコアとの相関を数値として可視化することで、より強力な動機づけを提供できる可能性がある。

3. 北陸大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科の英語カリキュラム (海外語学研修含む) およびカリキュラム外アプローチ

国際コミュニケーション学科では、(2017 生から 2020 生までの旧カリキュラムと 2021 生から現在までの現行カリキュラムに多少の違いはあるが) 1 年次および 2 年次では 4 技能の授業に加えて Presentation & Discussion と Grammar の授業が、そして 3 年生および 4 年生では TOEIC に特化した授業と Communication を重視した授業が設置されている。さらに、本学は留学制度としてアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、マレーシア、そして中国でも英語が学べるプログラムを提供している。このような国際コミュニケーション学科の正課のプログラムに加えて、2019 年度から第 1 著者 (島田) と第 2 著者 (大東) が TOEIC 対策講座を、そして第 5 著者 (吉田) が長文対策講座 (後にこちらは Intensive English の授業として開講された) を開き、学生の英語力の向上を図ってきた。

上記のように正課のカリキュラムだけで見ても決して英語科目が少ないわけではないが、それに加えて課外の講座を設けたのには大きな理由があった。それは、端的に言えば「基礎学力 (高校生までで学習する知識) の不足」と「勉強の仕方がわかっていない」という二点である。まず前者に関して言えば、メタ言語的な意味での言語 (用語) の使い方すら身につけていないという問題があった。本学で言語を教えている教員であれば、本学の学生が「形容詞」や「副詞」といった (文法) 用語それ自体の意味を理解できていないという場面に幾度も出くわしたことがあるだろう。言い換えれば、TOEIC にしても他の英語の参考書等にしても、日本語で書かれた解説の意味が理解できないのである。当然ながら、仮にそういった学生が TOEIC の練習問題を解き、その解説を読んだところで、理解できない (あるいは理解できていないということにさえ気づけない) というのは自明であろう。さらに、そういった学生が「自学自習し、学力を向上させる」といったトレーニングを受けていることは極めて稀である。例えば、本学の近年の入学選抜状況を参照すれば明らかであるが、本学科の入学者の中で、一般入試あるいはセンター試験・大学入学共通テストを用いて入学してくる学生は決してマジョリティではない。つまり、大学受験に求められる意味での英語力の基礎というのを身につけていないまま入学している学生がそのほとんどと言っても過言ではない。TOEIC の観点から見た平均的な大学生の英語力と本学の新入生の英語力にも差があることは、TOEIC®Program DATA ANALYSIS 2023 によっても裏付けられる。2022 年の全国における大学 1 年生の受験者 250,736 人の受験の平均点は 458 点 (英語選考の語学・文学系でいえば 494 点) とされているが、国際コミュニケー

⁵ 高梨の調査では学力の指標として CELT Form A を使用しているため、スコアによる比較はできない。

ション学科の入学時の TOEIC Bridge からの換算点ではおよそ TOEIC350 点から 400 点の間である。つまり、履歴書に書けるスコアを考えると、本学に入学した学生は 250 点から 300 点くらいはスコアを上げないと、履歴書にも書けないというわけである。その観点で考えれば、入学時からおよそ 3 年後には一斉に就職活動がスタートすると考えた時、本学科の学生は TOEIC スコアを含む英語力という点では大きく出遅れたスタートであると言わざるを得ない。

このような背景から、正課外の取り組みとして上記にあるような学習支援に取り組んできたわけだが、それによって TOEIC スコアを指標とした外国語としての英語能力の向上だけでなく、成長を促す立場である我々教員としても大きな収穫があった。Table 1 は第 1 著者（島田）が担当した 2018 生の成長過程である。⁶

Table 1 2018 生（2019 年度以降、留学後に TOEIC 対策をした学生）

学生	1 年次末	留学期間	留学直後	ベスト スコア	帰国後の 成長	伸び幅
A	280	長期	575 (3 年前期)	785 (4 年次)	+210	+505
B	430	半期	595 (3 年前期)	800 (4 年次)	+205	+370
C	600	半期	705 (3 年前期)	900 (4 年次)	+195	+300
D	325	長期	760 (3 年前期)	940 (4 年次)	+180	+615
E	315	半期	475 (2 年後期)	745 (4 年次)	+270	+430

Table 1 は TOEIC 講座を受講し、さらにその学習を継続的に続けてきた学生である（半期で勉強を辞めてしまった学生などは除いている）。1 年次末の TOEIC の結果は本学の平均よりも更に下の学生もいれば、中間から上位、また最上位レベルの学生も混ざっている。

まず教員にとって大きな収穫だったのは、ただ成長するのを待っているのではなく、このようにこちらの働きかけによって、「基礎学力（メタ言語的な意味での言語知識）」と「学習の仕方」を学び、それを本人が学外でも実施することで、スタート時点では英語力が低かった学生でも社会に十分にアピールできるほどのスコアを取得できるという点である。これは受験勉強を重ねてきた学生がほとんどである金沢大学が掲げる TOEIC スコアの目標が 760 点であることを踏まえても、特筆すべき成長とスコアと言えるであろう。⁷ ともしれば学生だけでなく保護者あるいは教職員さえも「頭の良い学生だから良いスコアが取れる」「高校の時にしっかり勉強したから良いスコアが取れる」というような幻想を明らかに否定し、他の学生たちにとっても「自分でもできるかもしれない」と思わせられる模範的な事例と言える。

⁶ これらの TOEIC 対策講座は前期・後期に概ね 12 回から 14 回程度、授業と同様に週一回行っていた。また必要に応じて学生の質問に応じる、あるいは夏休み期間等もオンラインで実施したケースも含まれる。

⁷ 出典は <https://www.kanazawa-u.ac.jp/enter/entry/sp/common/images/data/quarter.pdf>

更に、教員としての大きな収穫は、その成長にはスタート地点に関係なく、300 点程度を上げる為には、3 年（上記の例で言えば、1 年次末から 4 年次のベストスコア）はかかるということがはっきりと示されたことである。上述の通り、学年によってその平均にばらつきはあるものの、本学の入学者の平均のスコアは 350 点程度とすると、250 点から 300 点は上げたいところだが、そのスコアアップは基礎学力が高ければすぐに成し得るかというところではないことがわかる。更に、留意されたいのはこれらの学生の場合 TOEIC を真剣に勉強し始めたのは留学から帰国後に限られていた点である。帰国のタイミングによりその勉強にかけられた時間の長さは学生によって異なるが、帰国後の 1 年半程度でかなり大きな成長を遂げることができた。他方で、このような劇的な成長が見られた学生が他にも多数いると言われるれば、無論そのようなことはない。実際、2018 生が 4 年生の末に受けた TOEIC の平均は 481.7 である。これらの事実が示唆する点は、(i) 大学での学びをスタートした際の英語力のレベルによらず、トレーニングを積み英語を必要とする職務に求められるスコアには届く (ii) スコアで 300 点程度を伸ばすには 3 年にかかる (iii) 授業だけでなく TOEIC に特化したエクストラの学びは必要である、ということである。

更にこれらの観察は第 1 著者（島田）が担当した 2020 生でも再現できた（Table 2 参照）。⁸

Table 2 2020 生の成長過程

学生	1 年次末	留学期間	留学直後	ベスト スコア	伸び幅
A	430	半期	730 (3 年前期)	730 (3 年前期)	+300
B	480	半期	755 (3 年前期)	765 (3 年後期)	+285
C	490	半期	705 (3 年前期)	780	+290
D	490	なし	—	820	+320
E	495	半期	735 (3 年前期)	880 (4 年前期)	+375
F	695	長期	945 (3 年後期)	985 (3 年後期)	+290

2020 生は入学時の TOEIC の平均値（Bridge からの換算点）が 395 点と一番高い平均であった。それもあり、参加者も 2018 生よりは英語力が高い学生が集まっていた。また、2018 生を踏まえ、これらの学生の一部は 1 年次後期からこの講座に参加していたこともあり、TOEIC の為の学習時間は留学前から含まれている点が 2018 生とは異なる。しかし、

⁸ 2019 生はコロナ禍で留学が全くできなかった環境にあり学習意欲に関してはさほど高くなく継続して学びたいという学生がほとんどいなかった。また、他にも 2020 生で同じ講座に参加していた学生もいるが、比較検討の為に表 2 における学生は 2024 年 3 月に卒業した学生に限っている。ベストスコアの一部は学生の公開受験のデータも含む為、時期が不明のものもある。

ここで得られた大事な知見は、スコアアップの再現性である。スタートや取り組み始めた時期、あるいはベストスコアのタイミング等は学生によっても異なるが、学生のスタートのレベルに関係なく、語学を学ぶ為の基礎知識の定着を意図的に図り、同じように学び方（勉強の仕方）を教え、およそ3年間という時間を経て同じように成長することが改めて観察されたということである（厳密には2020生の場合はどの学生も就活に向けていたので3年次末がほぼベストスコアだったのに対し、2018生はスコアアップそのものを狙っていたのもあり4年次がベストスコアだった）。

これらの背景には言うまでもなく本人の学習意欲と努力があつてのものであり、教員はそのきっかけを与えるに過ぎないが、システムとしてこのように学生の育成を図り、場当たりの教育システムとその結果（例えば入学時から優れている学生だけが成長するというような状態）ではなく再現性のある教育ができていているというのは本学の英語教育の強みの1つではないだろうか。そこで、次の問題は、これらの学生のようなロールモデル、そしてその他の学生も含めて英語の学びに力を入れた学生はどのように進路を切り開いていたのだろうか。

4. 本研究の目的

本研究では、TOEIC スコアの成長と就職活動に焦点を当て、その関係を数値化して可視化することで、将来的には学生が TOEIC スコアを上げる動機づけの1つとして役立てることを目的とする。

4.1. 方法

2017年から2020年にかけて本学科に入学して2024年3月までに卒業した学生305名のデータを分析対象とした。データセットは、入学時のTOEIC Bridge のスコア(換算点)、1年次後期から卒業まで半期ごとのTOEIC スコア、就職した業界に加え、卒業時 GPA、語学選択、留学など海外語学研修経験から構成されていた。

語学選択は、英語、中国語、日本語の選択肢があつたが、日本語選択者7名は母語が日本語でない学生であつたため、分析データセットからは除外した。その結果、英語選択者241名、中国語選択者57名、合計298名のデータを分析対象とした。また TOEIC スコアについては、4年次後期までの最高スコアから1年次後期のスコアを引いた差分を算出して「伸び」として以下の分析に用いた。

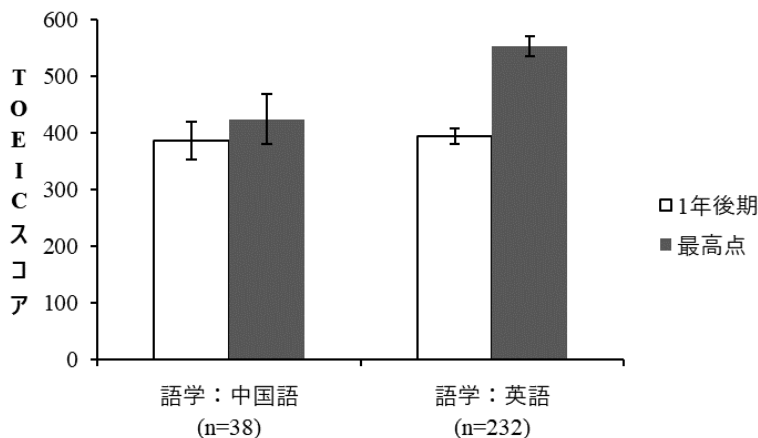
4.2. 結果

4.2.1. 語学選択別の TOEIC スコアの比較

本学国際コミュニケーション学科の英語教育が TOEIC スコアに与える影響を検討するために、2要因混合分散分析（時期×選択語学）を行った。時期要因は1年後期の TOEIC スコアと最高スコアの2水準、語学選択は英語と中国語の2水準とした。分析の結果、交互作用が有意であり（ $F(1,268)=60.488, p<.001, \eta^2_p=.184$ ）、単純主効果検定の結果、中国

語選択者に比べ、英語選択者のほうがよりスコアが上昇していることが見いだされた（中国語： $F(1,268)=6.962$, $p=.009$, $\eta^2_p=.158$, $d=.420$ ；英語： $F(1,268)=742.610$, $p<.001$, $\eta^2_p=.763$, $d=1.305$ ）。

Figure 1 語学選択ごとの TOEIC スコアの伸び



※エラーバーは 95%信頼区間

4.2.2. TOEIC スコアと卒業時 GPA との関係/TOEIC スコアと就職業種との関係

英語選択学生について、TOEIC 最高スコアと卒業時 GPA との間の関連を検討するために相関係数を算出した。その結果、中程度の正の相関 ($r=.609$, $p<.001$) が得られた。

また、英語選択学生について TOEIC スコアが就職業種に及ぼす影響を検討するために、CART 法による決定木分析を行った。従属変数を職業業種、独立変数を(1)TOEIC 最高スコア、(2)TOEIC 伸び、(3)卒業時 GPA、(4)海外語学研修歴、(5)入学時に行った TOEIC Bridge スコア（換算スコア）とした。結果の解釈の容易さと過学習への対策として、決定木の最大の深さを 5、分岐するノードの最小サイズを 10、と設定した。

分析結果の決定木を Figure 2 に示した。各ノードに各業種への就職率が示されているが、初期ノード（最上段）と①～⑦のターミナルノード（以下、TN）を比較して、4 倍以上の率となった業種を解釈した。なお、TN の説明に関しては同じ独立変数が複数回分岐に関与したり、実際の時系列では前後する変数があったりするが、適宜わかりやすい説明になるようにした。

TN②は、TOEIC スコアが 198 点以上上昇し最高スコアが 788 点以上となった群である。この群のメーカー就職率は 80%に達した。

TN④は、入学時点での TOEIC Bridge の換算スコアは 540 点未満だったものの、入学後に TOEIC スコアが 288 点以上上昇し、最高点が 705～788 点となった群である。そこまで入学時の英語力は高くなかったが、入学後にほぼ 300 点以上伸びて 700 点台になった群と言える。この群のメーカー就職率は 80%となった。

TN⑥は、入学時点での TOEIC Bridge の換算スコアは 540 点未満だったものの、入学

なお、TN①, ③, ⑤は全体の比率の 4 倍に達した業種はなく、特筆すべき特徴は見いだされなかった。また、卒業時 GPA は独立変数としては選択されなかった。

た, TOEIC スコアの上昇, 最高スコアに加えて留学などの海外での語学研修が, メーカー, 旅行・ホテル業, 情報・通信業, 英語科教員への就職率にプラスにはたらいっていることが示唆される知見が得られた。今回の分析は, 本学の国際コミュニケーション学科卒業生の TOEIC データを分析したものであり, カリキュラムの異なる他大学で同様の結果が得られるとは言えない。とくに就職業界に関しては地域的, 地理的な特徴が考えられ, 結果の一般化には限界がある。一方, TOEIC スコアが大学生の就職に及ぼす影響を実証的に検討してエビデンスを示した研究は他に見られないものであり, 本研究の希少度は非常に高いと考えられる。

今回の知見に基づいて実証性のある学生向けの動機づけメッセージを生成すると, スコアアップに目標をおいた「TOEIC スコアを 200/300 点アップしよう」と, 目標スコアを示した「700/800 点以上の TOEIC スコアを目指そう」となる。そして結語は「すると就職先の選択肢がぐんと広がるよ」となる。スコアアップと目標スコアのいずれのメッセージにするかは, 各学生の獲得スコア状況次第となる。例えば, TOEIC スコアが 500 点未満の学生に対しては「TOEIC スコアを 200 点アップしよう」が達成可能な目標となるし, 600 点台の学生に対しては「TOEIC スコアを 200 点アップして 800 点台にしよう」と複合したメッセージが目標となる。

一方で高梨(1991)に基づく, このように TOEIC スコアと就職との関連を動機づけメッセージにするのは道具的動機づけであり, 英語力の低い群にのみ受け入れられるものであろう。したがって英語力が一定水準を超えた学生(例えば, TOEIC スコア 800 点以上)に対しては, 「英語圏の人々, 社会, 文化をより理解できるようになりたい」といった統合的な目標を設定する必要があるだろう。

6. 今後の課題

まず一つ目に挙げられることとして, 多様な英語力を持った学生への対応の難しさである。入学時から高い英語力を持って入学する学生もいる一方, 直ぐには TOEIC への対応が難しいレベルの学生も少なくない。Grammar の授業においては, 入学時に英語プレースメントとして受ける TOEIC Bridge テストの結果を元にクラス分けが行われるが, 2024 年度の Grammar 授業では, 基礎英文法の復習を行うリメディアルレベルのクラスが初めて設けられた。最初から TOEIC を目標にスタートすることが難しい学生に対しては, 今までと違ったアプローチが今後必要となるだろう。授業内外にて基礎力を高めるための学習支援が必要となる。

二つ目として, TOEIC への動機づけである。本学科では, TOEIC750 点を目標点数として掲げている。その点数を達成すべく志の高い学生は, 前述されるように, 課外学習支援に参加し, 一定の成果を上げてきた。在学生の中には, 高校時代は全く英語を勉強してこなかったが, 大学に入って TOEIC 学習に没頭し, 2 年間で約 500 点を伸ばした学生もいる。こういった学生の実例を紹介するなど, 教員側にも動機付けへの工夫がますます求められる。また, 海外留学や海外研修などの参加をきっかけに, TOEIC に興味を持った学生もいる。英語力は社会に求められる能力であり, TOEIC は英語力を測る指標の一つであるが, 個々の学習動機に合ったアプローチも必要ではないだろうか。

本研究は, 「研究目的」においても言及したように, TOEIC スコアの成長は就職活動の手助けになる点を踏まえても, アセスメントとしての道具だけではない意義がある。しかし, 学生の学習意欲なくしては, その成長はありえない。したがって, 英語教育に関わる・

関わらないに関係なく、教職員が協働して学生が TOEIC スコアを伸ばす為の動機づけを普段から積極的に行うこともまた必須のことと言えるであろう。

参考文献

- 岩井千春. (2012). 「観光系学部における観光学に特化した英語教育：全国アンケート調査の結果から」. 『言語と文化』 11, p. 19-32.
- 喜田慶文. (2008). 「英語学習意識と英語能力の相関性に関する調査—観光系学生の英語能力と動機づけに関する事例研究—」. 『観光学研究』 7, p. 65-81.
- 甲田直喜, 遠藤祥雄. (2006). 「英語学習における意欲の向上」. 『dialogos』 6, p. 111-129.
- 西原明希. (2017). 「海外事情プログラム：プロジェクト型海外研修の経験と就職活動—卒業生の振り返りからの一考察—」. 『Hokusei Review, the School of Economic』 56 (2), p. 79-84.
- 塩沢泰子, 山口一美. (2006). 「大学生のキャリア形成教育とキャリアを意識した英語教育に関する調査」. 『生活科学研究』 28, p. 55-64.
- 高梨芳郎. (1991). 「英語学習における統合的動機づけと道具的動機づけの役割」. 『福岡教育大学紀要 第一分冊 文科編』 40, p. 53-60.
- 寺沢拓敬. (2013). 「「日本人の9割に英語はいらない」は本当か？—仕事における英語の必要性の計量分析—」. 『関東甲信越英語教育学会誌』 27, p. 71-83.
- 寺沢拓敬. (2015). 『「日本人と英語」の社会学——なぜ英語教育論は誤解だらけなのか』 研究社.
- Terasawa, Takunori. (2023). How Do Japanese Workers Experience and View International Communication?: A Web-based Questionnaire Survey. 『関西学院大学社会学部紀要』 140, p. 149-169.
- 林千晶. (2008). 「英語資格に関するニーズ分析—長崎ウエスレヤン大学の英語教育に何が求められているのか—」. 『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』 6 (1), p. 83-94.
- 八尋春海, デニス・ウールブライト, 塚本美紀. (2014). 「大学生の英語学習における動機と企業の求める英語力」. 『西南女学院大学紀要』 18, p. 201-206.